

「痛快ね。家で威張つてゐるお父さんも此處へ來ると唯の仙吉なんでもい。何だかお父さんの名前を初めて聞いたやうな気がしますわ。」
と僕に言つた。

さて「名古屋へいりやあたら寄て頂戴も」といふ注文は果したが、團さんの發祥地は、「笹島驛から三丁目、一軒置いて二軒置いて三軒目」よりはもつと遠く、碁盤割の本町通り、木綿問屋が軒を並べてゐるところだつた。店には小僧がウヨウヨしてゐる。子供も男女取り交せて十人といふ大家内、僕と同年の息子さんや田鶴子さんの従姉が相手をしてくれるので一向退屈を感じない。

「あんた、大須の觀音さんは賑かてなも。東京なら淺草のやうだも。活動寫眞が仰山あつて、店の小僧が毎晩行つて困るわえも。」
といつた具合に語尾を必ず「も」の字で終らせる。

「旦那、やつとかめでなも。この前は太閤御厄介になりまして、難有うございます。」



と團さんに挨拶した番頭さんの案内で僕達は近廻りを見物に出掛けた。お城の方へ一直線に進むで中を電車の通つてゐる外濠のところへ來ると、番頭さんは、

「この電車が瀬戸まで参ります。瀬戸物の出来る瀬戸です。」

と説明を始めた。

「徳さん、名古屋辯でやつておくれよ。」
と團さんが注文した。

「いゝえ、標準語でないと分りません。」

「さうく、君は二度も東京へ逃げて行つたから標準語を研究して來たらうね。」

「冗談言つては困るわえも。」

兵營のあるところを通つてお城の前へ出た。遙に天守閣が見える。成程、金の鯨が朝日を受けて燦爛としてゐる。僕が頼りに伸び上ると、徳さんは、

「今にあの直ぐ近くへ参ります。」

といつて、間もなく又、

「これが東京の馬場先御門です。明治四十三年にこの離宮へ移したのです。」

「は、あ、馬場先門が何時の間にか見えなくなつたと思つてゐたら此方へ來てゐるんですか？」

成程、確に馬場先門ですよ。」

と三輪さんは舊知の人に會つたやうなことを言つた。

「明治四十三年ぢやなからう？」

と團さんが例の辭を出すと、徳さんは、

「いや、確に四十三年です。私が初めて東京へ……」

「……逃げた年かい？」

「鯨が益々大きくなつて來たぜ。「伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持つ」といふが、城全節があゝの鍍金の鯨で持つてるやうだね。」

とお父さんが言ふと、團さんは又、

「馬鹿なことをいふと笑はれるよ。」

「鍍金ぢやないのかい。」

「いや、鯨の問題でなくて、歌のことさ。その歌は伊勢の歌でも名古屋の歌でもない。「石は釣つて持つ釣つて持つ石は、尾張名古屋の城へ持つ。」といつて、石の運搬法を説明した昔の歌だ。」

「面白いね。「石は釣つて持つ釣つて持つ石は」か。妙なことを知つてゐるね、君も。」



「餘り見括つて貰ふまいぜ。建築家の讀むだ歌は流石に實がある。夙に起重機の原理を説いてゐるところが豪いさ。」

「同時に名古屋の築城當時の光景を歌つてゐるぢやないか？」

「いや、名古屋に關係はないさ。石が主題になつてゐるもの。附録の方は「肥後の熊本城へ持つ」と直してもそのまま通用する。物理の原則を歌つてゐるんだからね。」

「獨逸ヴィッテンベルグの城へ持つ」としても同じことさ。」

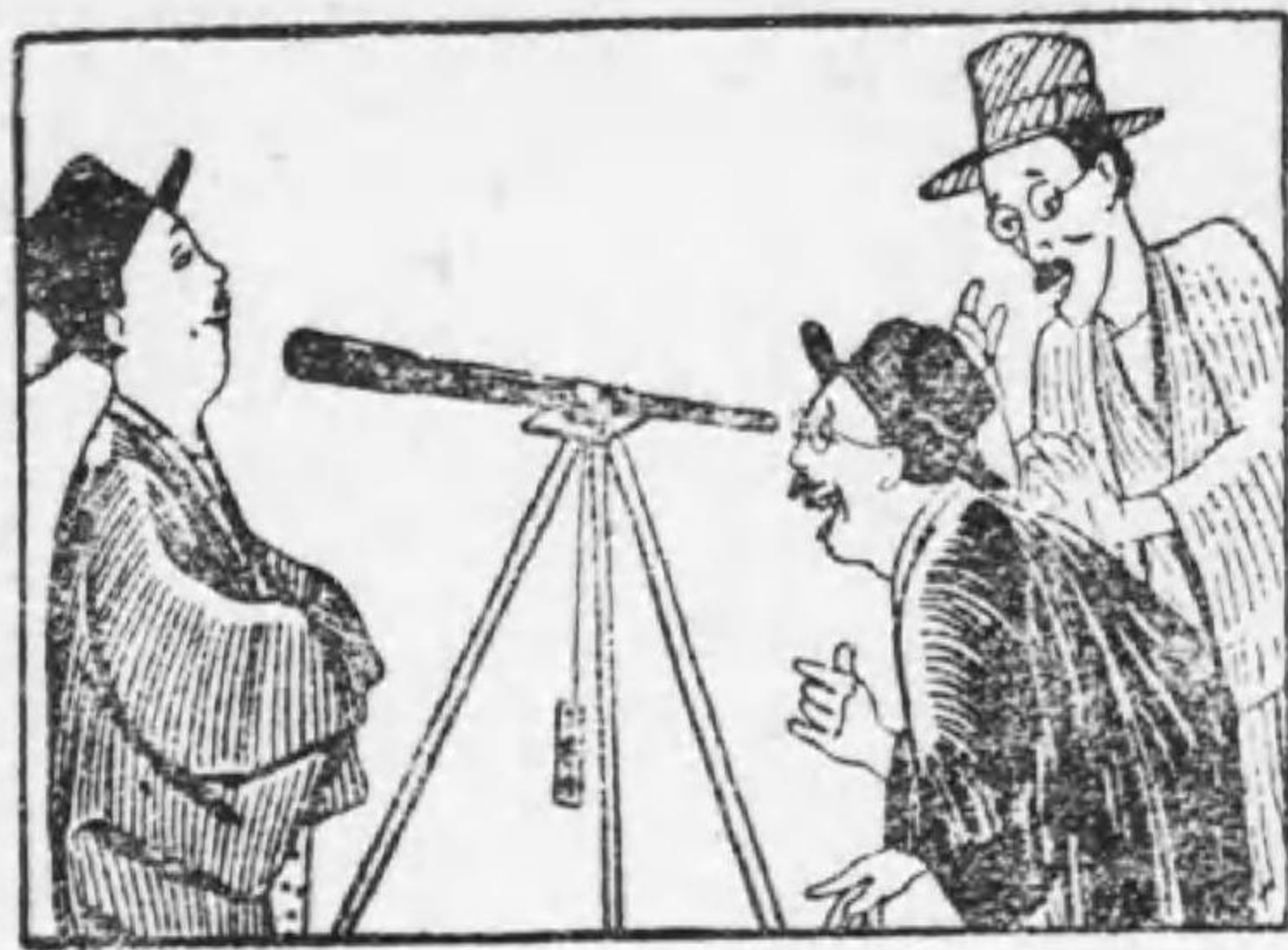
「恐れ入つた解釋だね。すると「伊勢は津で持つ」といふ歌はこの土地ぢや謡はないんだね？」

「いゝえ、謡ひますよ。あの方が矢つ張り眞正です。現に昨夜も魚の棚で……」

と徳さんがうつつかり口を迂らすと、

「魚の棚だつて？ 困るぜ、徳さん。もう彼處へは足踏みをしないと云ふ條件で僕が詫びてやつたんぢやないか。」

と團さんは眉毛を擧めた。



と説明してくれた。

間もなく僕達は濠を距て、眞正面に天守の見えるところへ來た。

「鯨が眩いやうでせう？」

と徳さんは指さしながら、

「昔柿の木金助といふものが大きな凧に乗つてあの鯨の鱗を一枚剥ぎ取つたことがあります。それ以來あの通り金網を張つて警戒し、半紙百枚以上の凧は御法度になりませんでした。金助の剥したのは右の雌鯨で、その遠眼鏡で御覽になると一枚足らなくなつてゐるところがよく分ります。」

「成程、見える。右の奴の口元だ。」

とお父さんは逸早くお茶屋の遠眼鏡を覗いてゐた。續いて皆代りぐくに鯨の魚に見参してゐる間も、

「この鯨を鑄るに慶長大判を千九百四十枚潰しました。鱗一枚でも一身上ですから、金助が悪心を起したのも無理はありません。名古屋の人は今日でも金に詰まるとこの鯨のことを考へます。目は徑一尺の銀むく、これだけでも一寸凌げますな。さうして腫が赤銅です。何しろ三十六大名が仰せつかつて人足二十萬、工事監督が加藤清正と來てゐますから、全くの金城鐵壁で、三百餘年の間瓦一枚も落ちません。」

と徳さんは案内役に身を入れた。

お城を一周して練兵の坂といふのを上つた。名古屋は完全に平坦な市で坂といふほどのは此處ばかりださうだ。再び碁盤割の市街に入つたが、古着屋ばかり並んでゐるところを通つた時には驚いた。

「此處は東京なら日陰町か柳原です。」
と徳さんが言つた。度々逃げて行つた丈に東京のこととをよく知つてゐる。

こんな風で僕達は徳さんの案内に委せてお晝前に中村公園と鶴舞公園を見物した。前者は小さいが、太閤が呱呱の聲を揚げたところで、猿面冠者産湯の井戸といふのが残つてゐる。後者は近代式の大公園、何かといふと市民が此處に集まること丁度日比谷公園の格だけれど、田舎だから警視廳はない。尤も一足飛びに監獄がすぐ近邊にあるさうだ。

「名古屋人を輕薄だといふが、それは中京の真相を知らないものゝ説だね。」



と團さんは池の畔のベンチにかけて煙を吐きながら語り出した。

「日本中で實力競争の最も赤裸々に行はれてゐるところは恐らく名古屋だらうと僕は思つてゐる。萬事實力即ち金力で情實が些つともない。看板よりも内容だ。それだから舊藩公だとか御家老だとかいふ連中が案外無勢力で、充分活動の資力を持つて入つて来る他所のものが却て幅を利かす。實に痛快なところだよ。」

「物價の廉いのも此處の一特徴だと昨夜御賢兄が言つてゐたね。」

とお父さんが言つた。

「それも實力競争の賜さ。女の子が生れると赤飯を炊いて祝ふといふくらゐ勘定高い連中だから、高いと思へば一切買はない。自然物價が廉くならざるを得ないぢやないか？ 東京見たいに高い〜と言ひながら買つてゐるのは違ふのさ。」

「女の子が生れると赤飯を炊くのは何ういふ次第だね？」

と三輪さんが訊いた。

「藝者に賣れるからさ。此處は藝者の産地としては日本一だぜ。おきやあせ種は名古屋コーチンと共にその名天下に鳴ると日本地理の教科

書に載せても宜いくらゐるもんさ。」

「おきやあせとは何ういふ意味だい？」

と三輪さんは一々訊く。

「置きなさいさ。お止しなさいさ。略して「おきやあせ」ともいふ。先刻電車の中で女學生が連發してゐたぢやないか。」

「名古屋言葉の特徴ですよ。おきやあせ〜といふものに、おきやあせんもんだでそれ見やあせ……」

と徳さんが低い聲で唄ひ出した。

「勞働賃銀も此處は他所より廉い。随つて方々から工場を持つて来る。砲兵工廠の如



きは東京からも大阪からも此處へ支廠を置いて現にこの間までは向ひ合つて仕事をし
てゐたよ。こんな工合で人口が益々殖えるもんだから、十里平方の都市計畫も一概に
無謀だとは言へないやうだ。』

「御賢兄もさういふ説だつたね。」

「御賢兄」と言ふなよ。僕が如何にも愚弟のやうに聞えるぢやないか。」

と團さんは少々憤慨したが、又、

「名古屋人の勘定高いのはこれ丈けの都會でるながらこの頃漸く電車賃の均一制が
行はれるやうになつた一事でも分る。以前は一區二錢で、最長限が三區だつた。三區
たつぷり乗る場合には文句もないが、二區半ぐらゐる場合には二區で下りて残餘の半
區を歩くのが名古屋氣質だから、五錢均一には極力反對したさうだよ。一區や半區乗
つて二區半拂ふといふ道理は逆も頭腦に描けないんだね。」

「三錢なら均一でも我慢してやるといふ論が盛んでなも。浮か／＼してゐると電車は

焼打を食ふところでしたよ。あゝいふ正義人道の問題が起りますと、名古屋中の人
この公園に集まります。」

と徳さんも生粹の名古屋人だ。五錢均一を不義非道と
心得てゐる。

僕達は再びその均一電車に乗つた。氣の所爲か餘り
込むでゐなかつた。殊に僕の前に坐つてゐた商人らし
い男は快々として幾度か溜息を吐いた。行き詰まつて
金の鯨の鱗を剥がす策略を廻らしてゐるのか、それと
も一區で五錢拂ふのは馬鹿くさいと考へてゐるのか、
僕には一寸判断が付き兼ねた。ところへ停留場で又一
人の商人體が乗り込むだ。見知り越しの間柄らしく、

「おや、何處へ？」



と頷くと、僕が鯨泥棒の嫌疑を半ばかりかけてゐた男は、

「病院へ行つて來ました。末のが疾風に罹つてなも。一寸も埒明かんでなも。」

「さうきやも、疾風はおぞぎやあぎやあも。」

「村岡君、疾風といふのは疫痢のことだよ。」

と隣にゐた團さんがお父さんに通譯した。

「疫痢が流行ると見えるね？」

「此處の名物さ。恐らく此處が本場だらうよ。此處のは特に悪性で勝負が早いから土地の人は疾風といつてゐる。」

「灌腸器と蓖麻子油の宣傳が必要だね。」

とお父さんが言つた時、僕達はもう新榮町に着いてゐた。

「榮町までブラ／＼歩かう。何も見物だ。」

といふ團さんの發起で僕達は賑かな町筋を歩き始めた。

「かういふ時には均一が特別癪に障りますね。唯一停留場で五錢ですもの。」
と徳さんが憤慨した。

「いゝさ。晝から熱田へ行くから埋め合せがつくよ。」
と團さんが慰めても、

「熱田までは以前なら三區ですもの、唯一錢しか開きがありません。」

と徳さんは一錢の儲けでは不満足らしかった。電車に乗つて儲けようといふのだから始末に負へない。

「この邊が名古屋の銀座なんでせうね？ ナカ／＼賑かだわ。」
と出鶴子さんが喜んだ。

「榮町が銀座でございます。この向ふのが伊藤松坂屋のあるところでございます。」
と徳さんが教へてくれた。

「あら、名古屋にも松坂屋があるの？」

と僕が訊くと、

「松坂屋は此方が本店よ。」

と田鶴子さんは能く知つてゐた。

「此處の名物は一體何だね？」

と榮町から本町へ折れると間もなく三輪さんが訊いた。

「先刻の「おきやあせ」とコーチン……」

と團さんが數へ切らない中に、

「動物は困るよ。」

「……尾張大根と……」

「植物も困る。菓子か何か家へ送れるものはないかね？」

「菓子なら納屋橋饅頭と鯨おこしが代表的だね。此處では値が廉くて嵩のあるものが萬能さ。萬事實質主義で押し通す。鯨おこしと來たら兵營の残飯で拵へるさうだから

甚だ實質的だ。晝には姪達が名古屋特有のものばかり差上げる積りで仕度をしてゐるよ。」

「御賢兄のお宅へ種々と御厄介を掛けるね。」

とお父さんが言つた時、大きな午砲が鳴つた。流石に團さんの引き廻した。豫定通り十二時きつかりに歸り着いたには感服した。

第十三回 鬼瓦の若い頃

「大きな川だなあ！ 何川でせう？」

と僕が言つた。

「木曾川よ。」

と先刻から地圖を見てゐた田鶴子さんが教へてくれた。

「御參宮でございますか？」

と品の良い老人が三輪さんに話しかけた。すべて汽車の中の交際は行先地の質問から始まる。

「え、あなたも張り？」

と三輪さんが應じた。

「はい。伊勢路はお初めてでございますか？」

「え。」

「さうですか。私は四十何年振りです。何しろ二十一か二の時で、明治十四年か十五年でしたからね。随分古いことですよ。」

「は、あ、私が漸く生れたか生れない頃ですな。」

若し數學に多少の眞理があるとすれば、この老人は一是でも年だけは人並に取ります。もう六十三ですよ」と啣ち、三輪さんは「當年四十一の青二才でございます」と謙遜したことになる。かういふ工合に先方が打ち明ける程度で此方も胸襟を開いてる



いますか？」

る中には必ずそれとはなしに自分の出所を口から這らせる。すると相手も一騎打の精神に従つて遠からん席にも聞えるぐらゐの聲で、東京

市日本橋區の住人といふ風に屹度名乗りを揚げる。

「日本橋は何の邊でございますか？」

とお父さんは火事とでも聞きつけたやうに向ふ側から乗り出した。

「本町三丁目でございます。」

と老人が答へた。

「さうでございますか。實は妻の里も本町三丁目でございますまして。」

「奥さんのお里が？ は、あ、三丁目は何誰様でござ

「木本と申します。」

「は、あ、木本さんでございませうか？ 木本さんなら何方も生え抜きて若い時分から御別懇に願つてをります。木本さんの御親類で、あなたが、は、あ。」

話し合つてゐる中に不圖共通の知人が出て來たり、商賣や道樂の同じなことが分つたりしても直ぐに肝膽相照らして名刺の交換に及び、別れる時には窓から靴を出してやつて、それつ限りになるものだが、里の鬼瓦の相棒と素性が知れて見ると、お父さんはこの老人に特別の敬意を表さなければならなかつた。

「さうでございましたか。木本君の、は、あ、御長女の、は、あ、御婿さんで、は、あ。」

と人額は額に掛けてゐた眼鏡を鼻の先へ下してお父さんの名刺を見ながら言つた。

「村岡君、大分鼻の下が伸びてゐるぜ。」
と團さんが冷かした。

「田鶴子さん、早く寫眞器をお出しなさい。」
と三輪さんまで譁つた。

「四十何年か前に利を抜け詣りに誘つたのが木本君ですよ。今しがたもその頃のことを考へてのたところですよ。何しろ未だ汽車が横濱までしかなかつた時分でしたから随分困難しました。しかし伊勢詣りは能く、深い御縁ですなあ。かう頭の禿けた今日又こゝで昔一緒に逃げて來た木本君の御長女のお婿さんと道連れになるのですもの。」
と老人は感慨無量といふ體であつた。

「木本の親爺もそんな時代があつたんですか？ あなたを誘ひ出したりしてナカク、悪友でしたね？」

とお父さんは嬉しさに言つた。

「いや、何方が悪友だか分りませんよ。約束は前以つてあつたのですからね。何方か路銀を盗み出し次第といふ手筈になつてゐたので、木本君が親爺さんの留守か何

かで成功して私を誘つたのでしたよ。」

と老人が説明した時、僕達は再び大きな川へ差しかゝつた。

「あの折は何でもこの川を舟で下りて桑名へ着きましたよ。さうく、津島から乗り込むのだです。この邊は一帶に人氣の悪いところでした。ね、旅のものと見ると随分酷いことをしたものです。宿屋と船頭が共謀になつてゐて、宿屋では煮えづくしの飯を出し、船頭は、「舟が出ますよ。舟が出ますよ」と火のつくやうに呼ぶでせう。迎も喉へ通つたものぢやありません。後から聞きました、彼處の宿屋は何處もあゝいふ風にして飯を食はせない仕掛になつてゐるのださうでした。」

間もなく遙かに玩具のやうな城が見えて、桑名に着いた。成程、

「名物しぐれ蛤！」

と賣子が呼んでゐた。

「一の鳥井は桑名にあると申してな、跛足を引き引きこゝまで来ると、ホツと一息つ

いたものですよ。」



と當年の抜け詣りは汽車が動き出すと共に又話し始めた。

「一の鳥井から本殿まで三日も四日もかゝるんですね？」

とお父さんが訊いた。實に調法な道連れが出来たものだ。僕達はこの老人のお蔭で車窓に現場を控へながら半世紀前の伊勢詣りの模様を詳にすることが出来た。

「こゝから二晩、足の弱いものは三晩泊りでしたな。昔は伊勢参宮が冠婚喪祭に次ぐ大切の行事になつてゐましたから、男な一遍は是非来たものです。一つはこれだ。若い者が世間を見るといふ仕掛になつてゐたのですな。こゝまで旅をする中には

東海道（とうかいどう）の目ぼしいところに一々泊（とま）りますし、奥州（あうしゅう）のズウ／＼、關東（くわんと）のダン、ベイ北陸（ほくろく）の權助（けんすけ）共（ども）とも一緒（いっしょ）になります。さうして關（せき）から彼方（あつち）では京大阪（きやうおおさか）は無論（むろん）中國（ちゆうごく）西國（さいこく）の連中（れんぢゆう）が交（まじ）りますから、確（たしか）に見聞（けんぶん）は廣（ひろ）くなりましたな。昔（むかし）の人も巧（うま）いことを考（かんが）へたものですよ。お伊勢（いせ）さんに託（たく）けて一種（いしゆ）の國民（こくみん）教育（けういく）をやつてゐたのです。」

「成程（なるほど）、御一説（ごいつせつ）ですな。さう承（うけたまは）ればこの頃（ころ）は交通（かうつう）が便利（べんり）になつた割合（わりあひ）に伊勢（いせ）を知らないものが多いやうですよ。現（げん）に私達（わたしたち）も皆（みな）初めてですからね。」

と團（だん）さんが半ば（なか）同感（どうかん）を述べた。

「さうですとも。交通機關（かうつうきくわん）が完備（くわんび）したり新聞（しんぶん）が發達（はつたつ）したりした丈（だけ）に遙々（はる／＼）出掛（でか）けて來（く）る必要（ひつやう）がなくなつたのです。」

「全く（まった）さうですなあ。私等（わたしなど）も神經衰弱（しんけいすわく）なものだからつい誘（さそ）はれて出（で）て來（く）る氣（き）になつたんです。」

と三輪（みわ）さんは黙（だま）つてゐれば宜（い）いのにと思（おも）ふやうなことまで發表（はつぱう）して老人（らうじん）の説（せつ）を全然（ぜんぜん）確（たしか）

認（た）した。



原因（げんいん）で車屋（くるまや）と大喧嘩（おほげんくわ）をしましたよ。」

「何（なに）に、便利（べんり）になつたものだからいつでも來（こ）られると思（おも）つて皆（みな）横着（よこぢやく）を構（かま）へてゐるんですよ。私（わたし）の友達（ともだち）には今（いま）に大臣（だいじん）になればどうせ報告（ほうこく）參拜（さんぱい）に出掛（でか）けるんだからと言（い）つてゐる奴（やつ）が三人（さんにん）もあります。」

とお父（ちち）さんは自分（じぶん）の無精（むしやう）から意見（いけん）を割（わ）り出（だ）した。

龜山（かみやま）を通（とほ）つたとき老人（らうじん）は、

「坊（ぼく）ちゃん／＼、この宿（しゆく）はお祖父（おぢい）さんの古戰場（こせんぢやう）ですよ。坊（ぼく）ちゃん（は）雲助（くもすけ）といふものを御存知（ごぞんち）でせう？ 私（わたし）達の來（き）た時分（じぶん）には車屋（くるまや）が未だ（まだ）その雲助（くもすけ）氣質（かたぎ）で、悪（わる）く強（し）ひたものです。何（なん）でも木本（きもと）君（くん）のことを奥（おく）ん坊（ぼく）といつたのが

と少時途切れてゐた思出語りを續けた。

「奥ん坊つて何です？」

と僕が訊くと、

「奥州者のことです。彼方の人は赤毛布を着て風呂敷包を擔いで田舎漢丸出です。奥さんとか奥ん坊とかいつて馬鹿にされます。車屋が煩く勧めた末、『何だ、この奥ん坊め』と言つたのです。此方は東京も日本橋の出身でせう？ 黙つちやるませんか。『人を見損ふな』と言ひ返しますと、『汝等こそ人を見損ふな。龜山の勘六さんを知らないか？』と來ました。『そんな田舎漢を何誰が知るものか』と答へた時先方が打つてかゝつたことになつてゐますが、實はさう言ひながら木本君が蝙蝠傘で撲つたのです。『汝！』と車を置いて組みついて來ましたが、此方は機先を制してゐます。私も加勢をして到頭叩き倒してしまひ、行きがけの駄賃に踏むだり蹴たりしてやりました。』

「大に江戸つ子の爲めに氣を吐いたのですな。」
とお父さんが喜んだ。

「ところがそれから先がいけないのです。町中でしたから忽ち人立がして、勘六の仲間も駆けつけて來ました。勘六は腰が抜けたと言つて往來の真中へ胡坐をかいたまゝ動きません。『さあ、この怪我人を何うして下さる』といふやうな次第で、今度は車屋仲間が私達を取り巻きました。江戸つ子もかうなると全然意氣地がありません。』

「膏藥代を取られましたね？」

「膏藥代丈けで濟めば結構だと思ひましてね、木本君は『おい車屋さん、お前さんは眞正に腰が立たないのかい？』と和解的態度に出まし



た。しかし勘六は、「散々踏むだけ蹴たりして置いて、へん、今更何だいな？・抜けた腰が立つものかいな」と尻捲りをして威張つてゐます。その間も車屋仲間は穩かならぬ権幕をしてゐましたから、利達は實際何うなることかと心細くなりましたよ。ところへ「一寸御免よ」と言ひながら彌次馬を押し退けて入つて来た二人連れがありました。た。「何だ彼だといつても結局この男の腰さへ立てば文句はないんだらう？」とその一人が言ひました。「はい、立つやうにさへして貰へば何も申しません」と勘六は最早何程にかなつたと思つたやうでした。するともう一人が側の豆腐屋か何かの店から十能へ火を一杯擲つて来て、突然勘六の尻へ當てがひました。忽ち勘六は弾機仕掛けのやうに立ち上つたばかりか、火と見ると一二間飛び退きました。「巫山戯やがると真正に足腰の立たないやうにしてやるぞ？」と仲裁人は車屋達を睨みつけました。結局、木本君と私は撲り得といふことになつたのです。」

「危いところでしたね。しかし好い仲裁人があつて結構でしたよ。」

とお父さんも安心したが、僕も胸を撫で下した。



と老人は話し終つて笑つた。

「私達はその二人と一緒に關の地藏さんに参詣して別れました。参宮でなくて大阪へ行くのださうでした。危難を救つて貰つたのですから後日のためにも思つて名を訊いても「私達は堅氣のものぢやありませんから」と言つて笑つてゐました。博奕打ちださうです。何も縁だからと言つて私達に晝飯の御馳走をした上に、この道中では特に喧嘩口論を慎むやうにと懇々説諭をしてくれました。私達は感心しましたね。博奕打ちも決して悪いものぢやありません。私はあの事件以來遊び人と聞くと妙に懐しいやうな氣がしますよ。」

「木本の鬼瓦が博奕打ちに説諭をされたとはいいことを承りました。」

とお父さんも笑ひ出した。さうして、

「面白い。實際面白いですな。關ですね、舞臺は？ 喧嘩は道中龜山嶺の龜山で、説

諭は關の小萬のあの關ですね？」

と場面を能く記憶に留めて置いて他日鬼瓦に當つて見る積りらしかつた。

「さうです。地藏さんのある關です。「關の地藏に振袖着せて奈良の大佛婚に取る」と

いふ歌がありますよ。淺草の觀音様同様小さいので評判の地藏様のあるところですよ。」

「こゝはどんなところでせう？ 下りて見る價値がありませんか？」

と團さんは津に着いた時訊いた。「つ」と唯一字停車場に書いてある。凝つと見てゐる

と餘り簡單で何だか馬鹿にされたやうな氣がする。縦も横もないから團さんも自然内

容の價値を疑つたのだらう。

「さあ、その折泊りましたが、一向覺えがありませんな。何でも馬鹿にひよろ長い町

でしたよ。津の宿は七十五町といつて名前の割に長いとかと詰まらないことを自慢に
してゐましたよ。」

と老人は餘り好い推察をしなかつた。

「津う、津うつて、唾でもするやうで驛夫も呼び悪さうね。」

と田鶴子さんも言つた。

「損な名前ですな。一寸した公園がある丈で他には何も見るものがないさうです

よ。」

と三輪さんは何誰に聞いて來たのか能く知つてゐた。兎に角かう不評判では津は歸途

も素通りだらうと僕は思つた。

しかし松坂では、

「こゝは三井家の發祥地で有名な金持町です。取引先の木綿問屋がありますから、私

も歸途に寄つて見る積りです。「伊勢の松坂女郎衆の名所迷はさんすな歸らんせ。」と

いつて、こゝは昔から繁昌なところですよ。』
と無暗に力瘤を入れた。

「その折お泊りでしたかね？」

と團さんが言つた時、田鶴子さんが、

「鈴の屋翁の書齋もそのまゝに残つてゐるさうでございますよ。」

「鈴の屋？ まさか待合ちやあるまいね？」

「厭やなお父さんね。本居宣長を御存知ないの？」

「知らないね。織田信長なら少し懸念だけれども。」

と團さんは悪い癖で文學者となると必ず茶化してかゝる。

「有名な歌人ですわ。敷島の和心を人間はば」なら何はお父さんでも御存知でせう？」

と田鶴子さんも好くない傾向でお父さんを悉皆見括つてゐる。

「あれならお父さんも知つてゐるさ。ふん、あの人がかい？ 専賣局の囑託だらう？」

安煙草の名を讀み込むだ手際は秀逸だと思つて常々敬服してゐるよ。」

と團さんは益々田鶴子さんを焦らした。

「時に今晚は何うしても矢張り古市泊りでございますか？」

とお父さんが遺憾さうに老人に尋ねた。

「はい。古市へ泊つて伊勢音頭を見なければ話になりませんからな。あなた方は何うでも矢張り鳥羽でございませうか？」

と老人は憐れむやうに訊き返した。

「鳥羽は朝の海が何とも言へないさうで、伊勢へ行つたら鳥羽に限ると教へられて参りましたね、宿屋まで最早定めてありますよ。」

「海の景色は二見の日の出が好いさうで、私は今夜は古市明晩は二見と定めてあります。伊勢音頭と日の出を御覧にならないのは惜うございますよ。」

見物客の豫定は信仰箇條のやうなものだ。各自我が佛貴しで、自分のが一番本式だと思ひ込むから可笑しい。先輩から聞いた聊かの知識を根據として絶対的の斷定を下し、相手に選擇の自由を許さないところは全く宗教に似てゐる。團さんの御賢兄の如きは、

「仙吉や、參宮を先に済ましてから鳥羽の皆春樓に泊つて、二見の浦は翌日廻しにする。一番手順が宜いよ。伊賀の上野へは未だ日の高い中に着くから町を見物しても友忠でゆつくり出来る。月が瀬へは翌朝九時頃に自動車が出るから……」
といふ調子で、もう疾うに梅が散つてゐるにも顧着なく、自分の過去の日程を時間さへその儘僕達に踏襲させやうとした。すべておういふ理窟のものだから老人は不思議の御縁と喜びながらも豫定の變更は思ひも寄らぬ、山田に着いた時、
「それでは外宮から古市までは是非御一緒に願ひませう。四十年前でも曾遊の地でございますから私が案内役を勤めますよ。」

と言つて眞先に俥に乗つた。

第十四回 あれは伊勢、こゝは伊勢

お父さんと顔を洗ひに行くと、團さんがもう冷水摩擦をしてゐた。

「お早う。相變らず几帳面にやつてゐるね。」

とお父さんが褒めた。

「相變らずつて、僕はこれでもう二十二年續けてゐるよ。」

と團さんは棒手拭で背中をグイグイやりながら答へた。

「些つとは効能があるのかい？」

「風邪をひかないこと不思議だね。君も一つ始めちや何うだい？」

「眞平だ。毎朝そんなに一生懸命になつて資本を入れるよりも時稀風邪をひいて濟崩しにする方が樂だよ。」

「無精な男さね。時に三輪君は眞正に弱つたのか知ら？」

「何に、チョコク／＼細君の顔が見たくなるのさ。」

「鶴子さんは疾うに身仕舞を済ませて縁側から海の景色を見晴らしてゐた。その傍の藤椅子に陣取つた三輪さんは毎朝の常例として首を傾けながら脈を数へてゐる。」

「何うだね？ 脈はあるかい？」

と團さんはお父さんと一緒に上つて来ると直ぐに冷かした。

「實は感心してゐるところさ。毎日の過勞が未だ一向影響してゐない。家で學校へ行つてゐる時よりも忙しいのだから身體具合は悪くなつて宜い筈だけれどもね。」

と三輪さんは健康を害ねるのが目的のやうに答へた。

「冥利を知らない男さね。同じ忙しいんでも遊ぶのと働くのは違ふよ。餘程豪い仕事をしてゐる積りだから驚いてしまふ。」

と團さんが言つた。

「兎に角身體具合の好いのは結構だよ。時々里心を起すのは君の癖だから何とも思はないけれどもね。」

とお父さんも安心したやうだつた。

御飯が済むと宿の亭主が出頭して挨拶を述べてから、

「今日はこれから御參詣でございませうか？」と尋ねた。

「いや、外宮さんも内宮さんも昨日済むで、今日はこの邊と二見さ。」

と團さんが答へた。

「左様でございませうか。お早いことで。鳥羽もこの附近の島めぐりをなさいますと丁度よろしい一日のお慰みになります。八十五島ござい



まして、すぐそこの坂手や桃取のやうなのは一島が一村で、役場も小學校もござい
ます。』

『昨日登る時には大骨を折つたが、高いところ丈けに眺望はいいね。』
とお父さんは島だらけの海を見渡しながらいつた。

『この樋の山からの眺望は東洋第一だと申します。』
と亭主は忽ち大きく出て、

『今朝は生憎と霞むでありますが、好く晴れた日には富士山が一間半に見えます。』

『一間半とは何うして測定したのだらう?』

と團さんが數字が出ると直ぐに理屈ほくなる。しかし亭主は、

『丁度一間半ございますな。』

と物指を當てたやうに繰り返して、説明の必要を認めなかつた。鳥羽の人は日の山公
園は東洋一富士山は一間半と確信してゐる。

『兄貴め、僕の山登りの下手なのを知つてゐて、態々こんな素天邊の宿屋へ指して寄
越しやがつた。以後脚の弱いものに必ずこゝを推薦し

てやることだね。』
と團さんは景色には餘り興味を持つてゐない。

『東京も結構でございませうが、男としては何と申し
ても矢張りこの邊の島へ生れて來るのが一番の果報で
ございますな。』

と少時してから亭主はツクづく感じたやうに言ひ出し
た。

『何故ね?』

と今度は三輪さんが相手になつた。

『女房が皆海女でございますからな。亭主は些つとも嫁ぎませぬ。亭主一人養へない



やうなら女の屑だと申すことになつてゐますから、この邊の島ぐらゐる男の樂なところはありませぬ。」

「それは耳よりな話だね。」

と團さんが喜んだ。

「亭主は女房が海の中でセッセと稼いでゐる間はへ煙管で淨瑠璃を語りながら櫓を押してゐればそれでもう申分ないのでございます。それに海女ほど貞操の堅いものはありません。裸體商賣だから風儀が悪からうと思ふと大間違でございます。亭主を大切にすること迎も類がありません。」

「食はせて大切にするんだから感心なものだね。お互ひのところ見たいに食はせてくれるから亭主が大切と言ふのとは段が違ふ。」

と團さんは益々嬉しがつた。

「海へ入つて鮑だの心太草だの眞珠だのを採るばかりでなく、畑の仕事まで一手に引

き受けて決して亭主に迷惑を掛けません。それですから私も常々女房に申すのでございます。——「海女を見なさい、海女を」とね。」

「何うだね、海女は、器量は？」

「左様さ、何分水につかるので大概ふやけてゐますが、時には相應奇麗なものもござい

ます。」

……

と團さんが長所を數へ立てると、

「要するにお互ひの女房とは全く反對の美點を具備してゐる。」

と三輪さんが言ひ、お父さんも、

「僕達は今更仕方がないけれど、若い人にはこゝの島へ婿に来るやうに勸めてやるんだね。好いことを聞いたよ。もう何か他に珍らしい話はありますか？」

「左様でございますな。昨日相の山でお杉とお玉の踊りを御覧になりましたか？」

「あれは見たが、昔から名物になつてゐる程のものでもないやうだね。」

「あれに先づ伊勢音頭でございますな、御覧になるものは。」

「伊勢音頭で思ひ出したが、芝居でやるあの古市の油屋は今ももうないやうだね。」

「有りますとも。相の山から古市へ入ると右側に油屋旅館といふのがございましたら

う？ あれでございますよ。」

「あれかい？ しまつた。昨日彼處で晝飯を喰べて連れの人に別れたんだが、あれは

唯の宿屋ぢやないか？」

「今は宿屋でございますが、あれがその「伊勢音頭」の油屋で、お紺の使つた品物や

貢の刀痕のついた襖や衝立が現に残つて居ります。折角お寄りになつて惜いことを致

しましたな。」

「つい宿屋だとばかり思つてゐたもんだからね。道理であの老人も古市へ来て油屋へ

泊らなくちやと頻りに言つてゐた。實際惜いことをしたよ。」

「又黴菌趣味か。古道具の疵物なんか何うでも宜いぢ

やないか。」

と團さんが海女の話ほどに力を入れない。しかし亭主

は、

「油屋の白井さんはナカくの豪物でございますよ。」

先代がじくなる直ぐに抱への女郎衆を悉皆親元へ歸

してやつて旅館に商賣替を致しました。思想の進むで

ゐる人はすることが違ひますな。迎も私共には真似の

出来ない藝當でございます。」

と古市の話が続けた。

「一美談ですな。」



と三輪さんが感心した。

「白井何といひますか？」

とお父さんは手帳を取り出した。こんなことを時々書き留めたりするところを見ると、ビクウイク・ペーパーズも萬更口ばかりぢやないのか知らと僕は思った。尤も團さんは、

「救世軍へでも報告するのかい？」

と冷かして矢張り信用してゐなかつた。

「もう何か他に面白い話はないかね？」

「然様でございませぬ。」

と亭主はかういふ閑人にかゝり合つては困るのだらうが、

「お木曳きが一寸見物でございませぬ。」

「お木曳きといふと？」

とお父さんは言葉の意味から訊いてかゝつた。豫備知識の全くない連中だから先生も並大抵でない。一々根本から説明しなければならぬ。

「内宮さんも、外宮さんも二十一年目には必ず御改築になります、その折土地のものが練出になつて材木を曳くのでございませぬ。」

「伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持つ、あれやいせ、これやいせ、と歌ひながら町を練つて歩くところはナカク景氣のよろしいものでございませぬ。」

「成程、名古屋の城の石を運ぶ歌を借用するんだね。」

と三輪さんは團さんの曲解を鷄呑みにして學殖を銜つた。

「いや、此方の木を曳く歌でございませぬ。」

と亭主は稍驚いたやうで、

「さうして「あれやいせ、これやいせ」と申すのも「あれはお伊勢様の御利益、これはお伊勢様の御利益、何も彼も一切萬事お伊勢様の御利益、有難いことぢや」といふ

意味でございますからな。」

といかにも道理らしい解釋を施した。

上り下りに馬鹿骨が折れる丈けに樋の山はるながらにして城趾でも日和山でも一目に見えるから一々足を運ぶ手間が省ける。そこで見物はもう済むだことにして、僕達は山を下りると直ぐに停車場へ志した。

「鳥羽は眞珠の名産地だよ。嵩張らない物だから何程でも買つて行き給へ。」

と團さんは町中へ来た時買ひ物好きのお父さんと三輪さんに譚つた。

「田鶴子さん、眞珠を買つてお貰ひなさいな。こゝは眞珠が名産ださうですから好い紀念になりますよ。」

とお父さんは復讐の積りか早速田鶴子さんに意地をつけた。

「買つてやるとも。しかし眞珠で候とお呪禁ぐらゐの小粒は物欲しさうで厭やなものさ。拳ほどのがあつたら買つてやるよ。」

「田鶴子さん、宜いですか？」

大きいのを買つて貰ふんですよ。」

と三輪さんも入れ智慧をした。

こんな冗談を言ひ合つてゐる中に僕達は土産物の賣店へ入つたのだから呼び込まれたのだからしてしまつた。

番頭が頻りに品物を並べる。田鶴子さんがそれを一々に取つて検める。三輪さんやお父さんまで種々と漁り始めた。

「田鶴子、この邊のは何うだね？」

と團さんは幾度か田鶴子さんの御機嫌を伺つたが駄目だつた。

僕は待つてゐる間に先頃お母さんと天賞堂へ行つた時のことを思ひ出した。夫婦だか兄妹だか兎に若い男女が女持ちの金時計を買ひに



來てゐた。男の人が品物を吟味して相談を掛ける度に女の人は横を向いた。参考の爲めに僕が回数を勘定し始めた頃には婦人殿下は首をあべこべに傾けたお雛様のやうになつてゐた。さうして一番好いのを差しつけられた時漸く舊に戻つた女優の栽培地が初めて領いた。あれが夫婦なら家へ歸つてから一波瀾あつたらう。若し兄妹たつたら兄さんは懲り懲りしたに相違ない。田鶴子さんも子供ながら、この邊の呼吸を相應に心得てゐると見えて、幾度か外向を向いた末、大きな眞珠の入つた襟留を買つて貰つた。

「うっかり口を利くもんぢやないね。ひどい口に遭つたよ。」
と團さんが零した。

間もなく停車場に着いた。水兵が大勢参官にも出掛けるところと見えて整列してゐた。

「軍港かね、こゝは？」

とお父さんが訊いた。

「軍港ぢやないけれど軍艦が始終來るらしいね。先刻も二三艘見えたらう？ 水兵と鐵工所の職工で持つてゐるとあの亭主も言つたぢやないか？」

と團さんが答へた。

「水兵は陸軍の兵隊と違つて如何にも愉快さうだね。皆ニコ／＼してゐる。服が子供のやうだから可愛らしい。」

と三輪さんは整列の直ぐ側で言つた。僕は水兵が怒りはしまいかと心配した。

「それは練兵や行軍の時とは違ふさ。かうやつて勢揃ひをして遊びに出掛けるんだもの。尤も陸軍は強制だけれどもこの連中は皆志願だから、その邊の關係もあるだらうね。實際愉快さうにやつてゐるね。」

と團さんも青ジャケット達を打目成つた。

「以前は兵隊が叔父さんのやうに見えたもんだが、この頃は若くなつたね。將校にも

こんな子供に戦争が出来るか知らと思ふやうなのがあるが、それ丈け此方の年が寄つたんだね。」

とお父さんも海兵を材料にして感想を述べた。

二見の浦で下りて夫婦岩へ行く途中、海岸へ出ると、軒並に壺焼屋が葎簀小屋を構へてゐる。

「お嬢さん、榮螺の壺焼をお喰りなてしいらつしやい。名物でございます。」

「坊ちゃん、榮螺の壺焼をお喰りなしていらつしやい。理科の参考にもなります。」と一々名を指して呼びかける。

一田鶴子も謙さんも餘程喰へたさうな顔をしてゐると見えるよ。一つ喰べて行かうか？」

と團さんは僕達に託けて、割合に奇麗な店へ差しかゝつた時腰を下した。

「不消化物らしいね。」

と躊躇した三輪さんも一人前平けて、

「この尻尾のやうな青いところを喰べられるのかい？」と念を押し、

「尻は胃病の薬ですよ。」

と女中に教へられて殻丈けは残した。

夫婦岩は甚だ評判が悪かつた。

「これは一寸詐欺にかゝつたやうな氣持がするね。これぐらゐの岩なら大抵の海岸にある。」

とお父さんが言ふと、團さんも、

「寫真ではあの玩具の鳥居が眞物に見えるから餘程巨大な岩だと思ひ込む。比例尺を普通の鳥居の現寸大と考へさせるところが手だ。」

「この石垣が又俗患だね。宛然江の島で賣つてゐる介細工の筆立見たいだ。」

と三輪さんに至つては側の石垣まで眩した。

第十五回 純國産鍵屋の辻

豫定の時刻に伊賀の上野に着いたが、迎へに出てくれる筈だつた三輪さんのお弟子の姿が見えない。電報は相役の田鶴子さんの文案通り僕が認めて昨夜の中に鳥羽から打つて貰つたのだが、何うしたのだらう？

「君が平常時間通りに學校へ出ないもんだから今日も一汽車や二汽車は後れると思つてゐるんぢやないかい？」

とお父さんが言つた。

「まさか。僕もこれで學校の時間丈は几帳面だよ。ことによると電文が不明瞭だつたのぢやなからうか。」

と三輪さんはお弟子の責任を田鶴子さんと僕に轉嫁しようとした。

「斯うやつて待つてゐても始まらない。兎に角上野へ行つて宿屋へ落ちつくとしやうぢやないかい？」

と團さんは赤帽に切符を買ひにやつた。

「上野へ行くつて、此處が上野だらう？ 伊賀上野とちやんと書いてある。」

「いや、眞正の上野はもつと先きだ。此處で乗り替へるんだよ。」

間もなく僕達は玩具のやうな汽車へ押し込められた。輕便鐵道といふのださうだが狭くて遅い上にガタ／＼して一向便利でない。

「英語では輕鐵道だね。便の字は些つとも入つてゐない。これを輕便鐵道といふのは君達のやる誤譯の一例だね。」

と團さんが悪口を言つた。

「今の上野は偽物の上野かね？」

と三輪さんは未だ上野を氣にしてゐた。

「偽物といふ次第でもないけれど、上野の町はこの先きさ。驛が田圃の中にあつて町は一里も二里も奥に引つ込むでゐるやうなところがよくあるよ。さういふ地方に限つて發展が後れてゐる。自分達の頑冥不靈がいつまでも崇るんだから今更他を怨みやうもないのさ。」

「何うして？」

「鐵道の出來初めには陸蒸汽が通ると泥棒が入り込むとか物産を悉皆持つて行かれてしまふとかと妙に消極的なことばかり考へて、田舎は大抵二の足を踏むものださうだよ。その中でも分別のある地方は、何うせ通るものなら仕方がないから、驛を成るべく町から離してくるやうにと政府へ運動して成功したんだね。驛から大分遠いところを見ると、上野もこの頃になつて後悔してゐる組だぜ。」

「成程ね。山の中で人智の進まないところだらうからね。それで今更輕便鐵道でつぎ足して騒ぎを入れてゐるのかも知れない。」

と二人は土地の人達が乗つてゐるのに勝手な熱を吹いてゐる。

「はい、友忠といふのですが、下りてから餘程ござい
ますか？」

とお父さんは隣席の商人體と話を始めた。

「友忠さんなら東大手でお下りなされ。」

と商人が教へてくれた。

「いゝや、西大手が近うあす。三町ぐらゐであす。」

と商人の連れの中老が口を出した。

「三町といふことはありませんよ。東大手から五町代
西大手からは七町ありますよ。」

「いゝえ、西大手から三町です。私はつい筋向うで

あすから始終試してゐますが、東大手よりは煙草を一服喫つてお茶を一杯飲むほど早



うあす。」

と雙方取つて譲らず、結果中老が僕達を宿屋まで案内してくれらることになった。伊賀の人は親切で強情だと僕は思った。何うでも宜い問題だけれど物好きに道程を測りながら歩いたら、確かに七町はあつた。それでも中老は、

「何うです？ 近うあせう？」

と確信的に言つて別れた。

「まあ、一服やつてお茶を飲むほど儲かつたんだから。」

とそのままお神輿を据ゑてしまひたがる團さんを促して、僕達は先づ見物を果す爲めに宿屋を出た。

俥に乗るほどのこともなからうと高を括つてブラ／＼歩き始めたが、伊賀の上野はそのお手本の東京の上野よりか餘程廣い。成り上りのひよろ長町ではなくて、人間同様な榮養の好いのは必ず横幅があるといふ團さんの都會の定義にしつくり合つてゐる。

芭蕉翁の故郷塚を尋ね當て、木像に拜面するまでに、

「もし、愛染はんは此方へ参りますか？」

とお父さんは訊き方を呑み込むでしまつた。芭蕉翁と言つても通りがかりの人には通じない。續いて簗蟲庵へ向つた折にも、

「一寸お尋ね致しますが、この邊に簗蟲庵といふのはありませんか？」

「知りまへんなあ、そんなものは。」

芭蕉はんのゐるところで。この見當だと聞いて参りましたが……。」

「芭蕉はん？ そんな人存じまへんなあ。」

といった調子だつた。

「驚いたね。何人も知らない。翁も案外人氣がないんだね。やはり豫言者は故郷に尊ばれないのか知ら？」

とお父さんは頻りに首を傾けてゐた。

「君、相手が悪いんだよ。先刻から選りに選つて女子供やヨボく爺さんにばかり訊いてゐるからさ。」

と三輪さんが注意した。

「要するに發句なんでもものは現代生活に没交渉だといふ證明さ。あゝ、腹が空つた。」と團さんは芭蕉が俳人だといふこと丈けは知つてゐるやうだつ

漸く探し當てた揚句の果が、庵は今では個人の別荘とあつて門が閉つてゐた。

「これでは町の人も知らない筈だよ。住宅になつてゐるんだもの。」

とお父さんは翁の爲めに辯じたが、拜見させて戴くのに又少時手間を取つたので、

「何うも君達は物見高くて困る。こんな安普請がそんなに有難いのかなあ。」

と腹のへつた團さんは頗る不平らしかつた。

「僕も大分草臥れた。今度は鍵屋の辻だが、案内者がゐないから嘸又まごつくことだらう。今日こそは久しぶりで少し樂が出来ると思つてゐたら、電報が間違つたばかり

に飛んだ目に遭ふ。」

と三輪さんも零した。

「厭な人ねえ！ 皆私達の所爲にして。」

と田鶴子さんは僕に目くばせをして三輪さんを睨むだ。

「もう洋服を着る時にお手傳ひをしてやらない方が宜いですよ。」

と僕も朋輩の好みで意地をつけてやつた。

「君、箕蟲庵が妙に現代的に前腦に泌み込むでゐると思つてゐたら、彼處は根上君の

舊居だつたよ。」

とお父さんは他の思惑には頓着なく矢張り翁の遺跡を問題にして振り返りながら言つた。

「さうく。根上君は芭蕉の研究がてらこの邊の中學へ來てゐたことがあつたね。」

と三輪さんは古いことを思ひ出したやうに答へた。

「一つ葉書を出してやるかな。あの箕蟲庵で初めて世帯を持つたと言つてゐたよ。さうしてそれがナカ／＼お安くないんだぜ。中學校に運動會があつた時、若い奇麗な女學校の先生が生徒を引率して見物に來たんだとさ。すると先生忽ち見惚れてしまつて茫然自失、運動會は其方除けで、唯々……」

「何方の先生だい？」

「何方も先生さ。生徒なら差詰め退學處分だね。」

「いや、何方の先生が見惚れたといふのさ？」

「それは無論男の方が女の方に見惚れたのさ。女が男に見惚れてしまつてバツタリと扇子を落す拍子に木の入るのは遺憾ながら芝居の舞臺丈けだよ。」

「何だつて？ 見惚れてゐるところを寫眞に撮られたつて？」

と團さんが寄つて來た。

「いや、安心し給へ。君のあの話ぢやないよ。しかし君は根上君は知らないね。とこ

ろで側（そば）にゐた校長がそれと察（さつ）して、「お氣（き）に召（め）しましたかな？ 何（なん）なら媒（ばい）妁（やく）の勞（らう）を取り

ませうか？……」と冗談（じやうだん）を言（い）つたさうだ。すると根上（ねがみ）君（くん）は何處（どこ）までも眞剣（しんけん）で、「何（なん）うぞお願（ねが）ひ致（いた）します。私（わたし）の家（うち）は今（いま）は東京（とうきやう）で商賣（しやうばい）をやつてゐますが、先祖（せんぞ）は代々（だいだい）近江（あふみ）にゐて、清和源氏（せいわげんじ）の末裔（まつえい）でございます」とかと、系圖（けいづ）まで曝（さら）け出して血相（けつさう）を髪（か）へてゐた。かういふところ（ところ）は如何（いか）にも天真爛漫（てんじんらんまん）で、俳人（はいじん）氣質（かたぎ）丸出（まるだ）しだね。あの人の句（く）に「蝸牛（こくわ）や清和源氏（せいわげんじ）が鼻（はな）の下（した）」といふのがあるが、恐（おそ）らくこの時（とき）の感想（かんさう）を現（あら）はしたものだらう。細君（さいくん）を貰（もら）つたり、句（く）を讀（よ）むんだり、根上君（ねがみくん）もこゝでは大分（だいぶ）活動（かつどう）したらしい。」



「何（なん）ういふ意味（いみ）だらう、その鼻（はな）の下（した）といふのは？」

と三輪さんが解釋に苦むだ。

「あの瞬間の鼻の下は蓋し蝸牛を宿すに足つたらうといふ述懐さ。まひまひつぶろといふ奴は鈍間の表象だからこの際調和が好い。それに一つとところに凝つとしてゐないから、これで鼻の下の寸法が可なり長く現れてゐる。」

とお父さんは眞面目になつて説明した。

「下らないことを言つてゐるぜ。」

と團さんが早足になると、

「團君の話といふのは何うしたんだい？」

と又三輪さんが訊いた。

「あれは證據が天下に發表されてしまつたんだから、今更匿すにも及ばなからう。團君、あの事件はいつの花の日會だつたかね？」

「馬鹿ばかり言つてゐると日が暮れてしまふぜ。」

と言つて團さんは田鶴子さんを磨いた。

「二三年前の花の日に團君が銀座で何處かの若い令夫人から造花を買つたと思ひ給へ。するとその場を新聞記者が寫眞に撮つて夕刊に出したんだね。團君は決して見惚れたんぢやないと言ふが、何人が判定しても凜然とはしてゐない。殊に細君は、「こんな器量も好くない方に花を挿して貰つてニタ／＼してゐるところは不見識といふものですよ」と手酷しく團君を極めつけたさうだ。兎に角可なり間が伸びてゐて何うしても物議の種になる寫眞だね。参考のために切り抜いて置いたから御希望なら今度お目にかけてやう。」

「それは團君も退引ならぬね。僕の學校にも丁度そんなかゝり合ひに遭つた男がゐるよ。」

と三輪さんは草臥れたとは言ひながらも早く歸つて休まうといふ分別がない。さうして、

「去年から婦人の聴講を許したところが、数名の志望者があつた。そのうち一人が水際立つた美人だつたので、學生の注目を惹くばかりか、時折教員室の話題に上つてゐたんだね。すると或日のこと新聞の學校記者といふのが来て、その美人の登校姿をキメラに納めた。ところが教師が一人一緒に寫つてしまつた。新聞は社會の縮んだといふから、かういふものが出ると眞に具合が悪い。見惚れたのでなくて見詰めたのだと當人は主張してゐたが、要するに五十歩百歩さ。やはり團君式に餘程間が伸びてゐたよ。さうしてその男が生憎獨身者だつたので、なほく話に花が咲いた。人の悪い奴がその新聞の寫眞に題して、曰く、「獨身主義者の悲哀」さ。穿ち得て妙だらう?」

「成程、巧いね。その先生といひ團君といひ又根上君といひ、揃ひも揃つたもんさ。して見るとポーブの名句も The proper study of mankind is woman と訂正しなければならぬことになるね。」

とお父さんか嬉しがつた。西洋人の言葉を引合に出すときは悦に入つた絶頂だ。

トボく頃宿へ戻つてお湯に入り御飯を喰へ始めたが、土地の知人がゐないと一向話がはづまない。女中方はお給仕が本務だから、一々質問を答へる責任はないと信じてゐるらしく、何を訊いても「はい」とか「いゝえ」とか唯の一口で片付けてしまふ。お父さんは餘程努めたが、

「はい、藤堂様です、こゝの殿様は。」

「伯爵だねえ?」

「はい。」

「子爵だつたかな?」

「さあ。」

「やつぱり伯爵かい?」

「以前は伯爵であしたが、今は何をしてゐますかしら。」

といふくらゐが關の山で全く取りつく島もなかつた。ところへバタバタバタと階段を

踏み鳴らして入つて来た青年紳士があつた。

「先生、皆さん、何うも飛んだ失禮を致しました。」

といふ挨拶で、これが三輪さんの遅刻のお弟子松本さんと直ぐ知れた。

「電報が間違つたらう？ 子供委せにして置いたもんだから。」

と三輪先生が大きく出た。尤もお弟子さんの手前、このお子さん達が身の邊の世話をしてくれるので、漸くこゝまで出て来ましたとは告白し兼ねたらう。

「いや、電報は昨晩確かに戴きましたが、氣を利かして龜山までお迎ひに出掛けたのがソモソ間違の因でした。」

と答へて、松本さんは、

「姐さん、私にも御飯を持つて来てお呉れ。御一緒に失禮することにしませう。早速で済まないが、急いでね。」

と命じた。物の爲こなしや言ひ廻しが先生より餘程世間慣れてゐる。

「謙さん、電報が着いて宜うございましたね。」

と田鶴子さんが態とらしく僕を顧みた。

「真正に宜うございましたね。」

と僕も意を體して應じた。しかし三輪さんは、

「それは打つた電報ですもの、着かなけりや間違です。」

と今更のやうに教へてくれた。些つとも手答がない。

「皆私の失策ですよ。その次第は後刻ゆつくり申上げますが、要するに伊賀の國風が悪いのですな。」

と却つてお弟子さんの方へ響いたので氣の毒でならなかつた。

食事が済むと、田鶴子さんと僕は例によつて夫れぐ家への通信事務に従つた。必要は發明の母なりといふ通り、毎日手紙を書かされると自然種々な簡便法を思ひつく。昨日は筆紙に盡し難しといふ句を應用して見た。此奴は頗る調法だ。好い景色は大抵

これで間に合ふ。今日は餘は後便にてといふのを利用した。これは草臥れた時に至つて便利だ。「今日伊賀の上野見物、餘は後便にて」で充分用が足りる。殊に繪ハガキを使ふと餘白が少いから勞を省いた形跡は些つとも見えない。大抵の約束には履行の責任が伴ふけれど、後便だけは催促を受けて裁判沙汰になつたといふ例を聞かない。後便なる哉後便なる哉！お母さんへも三輪さんの家へも發明序に日本橋の鬼瓦のころへも後便で御機嫌を伺つて、後便は最良の方便だと思つてゐると、松本さんが小便の話をはじめた。

「尾籠なことを申して甚だ恐れ入りますが、この伊賀の國ほど小便の出るところは天下にありません。實は今日もその小便で思はぬ不覺を取つたのです。龜山までお出迎ひに参りましたが、時間があつたので一寸親戚へ寄りました。つい話し込むでしまつて、停車場へ驅けつける途中伊賀名物の小用を催しました。又知合の家へ飛び込むといふ騒ぎです。その結果出迎へる積りの先生方の汽車を陰なからお見送りしたや

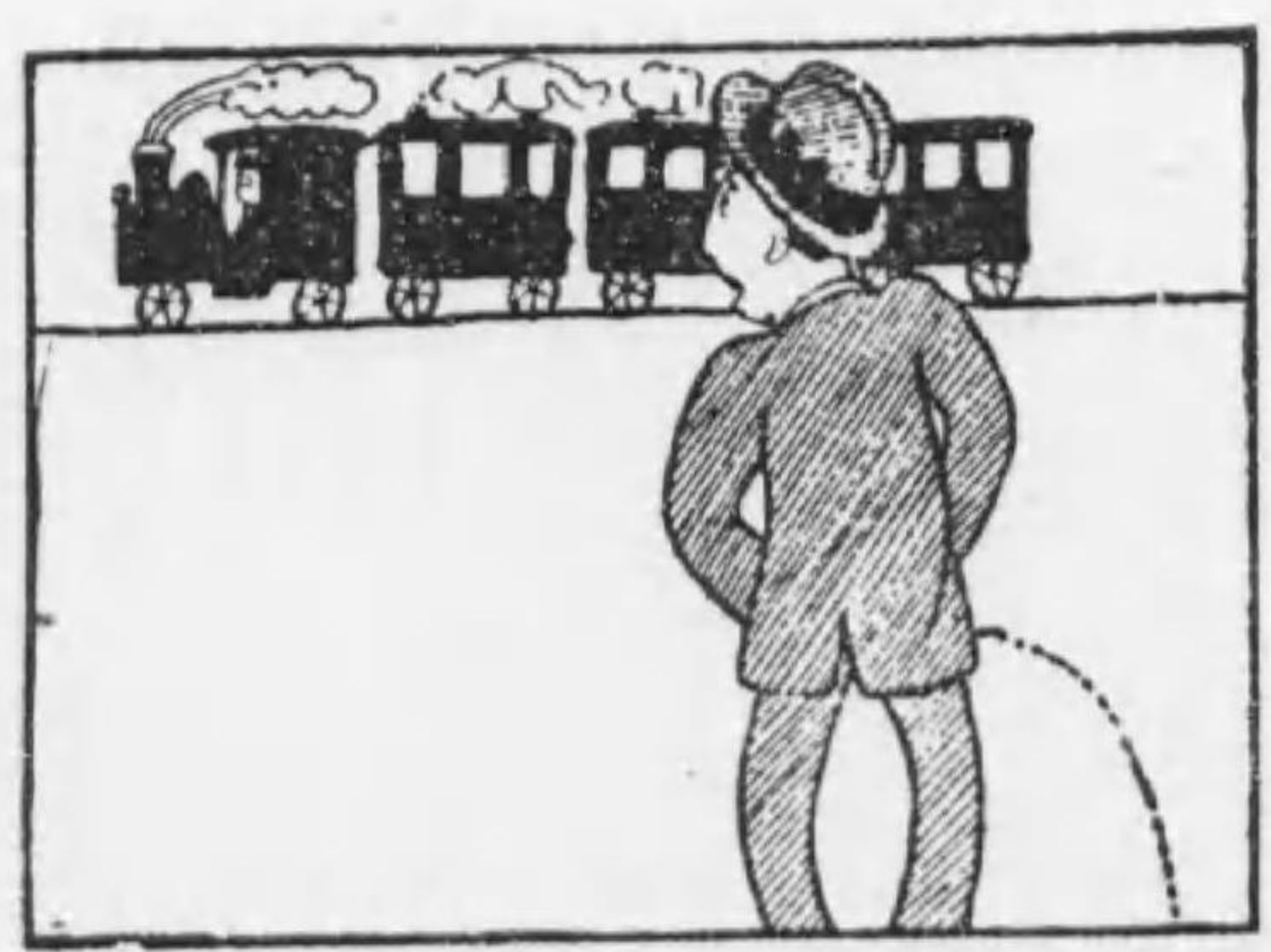
うな仕末になつてしまひました。馬鹿くしくしてお話になりません。」

「何ういふ次第だらうね？ 小便淋瀝といつて出の悪い方の病氣はあるやうだが、さう無暗に出るのは聞いたことがない。しかし矢つ張り一種の地方病だらうね？」

と三輪さんが訊いた。神経衰弱は何でも病氣で釋明しようとする。

「いや、病氣ぢやありません。この地方では少くとも一日に一回は粥を喰べるのが昔から不文律になつてゐますから、自然尿利が好くなり過ぎるのですな。」

「はゝあ、お粥を喰べますか？」
とお父さんがその後を促した。



「朝とか晩とか又は朝晩二回とかと貧乏人でも金持でも必ず粥を喰べて米の節約をすることになつてゐます。これは昔饑饉のあつた時お布令が出たのをそのまま守つてゐるのだと申します。そこで彼處の家では顔の映るやうな茶粥を喰べてゐるといふ形容が起つて來ますが、お分りですか？」

「さあ、東京の下宿屋の味噌汁と同じ關係ですかね？」

と團さんは書生時代の經驗から柄になく正鵠を得た。

「さうです。彼處の家は貧乏だといふことをさう申します。」

一芭蕉の句の「馬に寝ねて残夢月遠し茶の烟」といふのがその茶粥を炊く煙ださうですが、一體どんなものですか？」

とお父さんが六ヶ敷く出た。

「何でもありませんよ。たゞ茶を入れて煮た粥です。それに麥を交ぜたのを麥茶粥といひます。小豆を入れたのが小豆茶粥、芋を入れれば芋茶粥です。」

一麥茶粥に小豆茶粥に芋茶粥。とナカ／＼種類がありますな。」

「まだ餅茶粥といふのがあります。これは主に冬分寒さ凌ぎに喰べます。」

「餅茶粥と。これで五つになりますな。お待ち下さいよ。餅茶粥は寒さ凌ぎと。冬はやはり寒いのですか？」

「寒い何のと申して、「伊賀の上野は高丘で寒い」と昔から歌にもなつてゐるくらいで、随分底冷えがします。そこへ持つてきて皆天井の映るやうな粥腹でせう。小便が出ざるを得ませんや。關東の連れ小便といひますが、實は伊賀の連れ小便です。中學生等も登校の途中、「おい、小便しやうか？」と言ひ出すのが一種の禮節になつてゐます。」

と松本さんはお粥から又本題へ戻つたが、

「いや、遅參の申譯から飛んだ尾籠な話になつてしまつて恐縮です。これからはもつと奇麗なところを申上げませう。伊勢からお出になると何方も先づ此方の人の色の

白いのに驚くさうですが、實際伊賀はこれで美人系ですからね。この町にも随分奇麗な女がゐります。」

「さうですか。ついつつかりしてゐて気がつきませんでしたよ。」と團さんが言った。

「それで根上君も見惚れたんだね。しかし君は美人系らしくないぢやないか。第一色が黒い。原則を證明する例外といふ組かね？」

と三輪さんは思ふ通りを口に出す。

「私のは東京の影響です。これでも伊勢の人よりは白いのです。私の姉婿は伊勢から來ましたが、私ほどの色になるのに五年かゝりましたよ。彼方の人は潮風に吹かれるから實に黒いです。」

「小便系と美人系ですな。」とお父さんは手帳に認めた。

「その美人系もこの上野が中心です。妙なお話ばかりするやうですが、この土地は有名な妾宅地です。伊賀では上野に妾宅を構へてゐないものは紳士といへないことになつてゐます。」

「成程、東京でも結局其處へ歸着しますね。あなたはまだ紳士の資格がありませんか？」

と團さんが笑ひながら訊いた。

「前途遼遠ですな。親爺の脛を嚙つて銀行へ出てゐるんですもの、迎もあかんです。」

と松本さんは然も心細さうに言つた。

田鶴子さんは未だ手紙を書いてゐたが、この時、

「謙さん、あなたは今日も繪ハガキで濟ましてしまつ

て眞正に狡いわね。私、鍵屋の辻で未だ手間を取つてゐるのよ。彼處は「ひだり奈良



道」でしたかね？」

と僕に確めた。

「ひだり奈良道ですよ。」

と松本さんが答へた。さうして、

「彼處は上野一番の名所です。白鳳城を知らなくても鍵屋の辻を知らないものはありません。伊賀越は忠臣蔵や曾我物語と共に日本の三大仇討になつてゐますからな。尙ほその大立物の荒木又右衛門が矢張り伊賀の人ですから、鍵屋の辻は純國産の舊蹟で私達も鼻が高いのです。」

と約三百年前の經緯を子供の時分に目撃した出來事のやうに物語り始めた。例へば、
「又五郎の一行を待ち受けてゐる間に又右衛門は數馬その他二名のものとのあの辻の飲食店で腹拵へを致しました。伊賀の人でしたが、この日は特に茶粥を控へました。切合最中に差支へては固ると思つたのでせう。何を喰べたかと申すと蕎麥と鰯だつたさ

うです。蕎麥は側に通じ、鰯は當地の方言の果すに似てゐます。蕎麥で鰯、即ちその場でやつつけてしまふと縁起を祝つたのです。小便の用心をしたところは私よりも先見の明があります。矢張り迷信家だつたと見えますな。この飲食店もつい先年まで残つてゐましたよ。」

といつた行き方で、これが妙からず興を添へた。

鰯された連中の後始末から松本さんは白鳳の城紹介に移つて、

「若し竣成したら確に日本一の名城になるところでした。」

と残念がつた。天神さまのお祭典に就いても、

「此處の山車は皆徳川時代のものばかりです。近郷近在から雲霞と人が出て、その盛ん、なこと京都の祇園祭を除けば恐らく日本一です。」

と言つた。この筆法に従ふと伊賀の上野もそれより大きな町を悉皆除ければ間違ひなく日本一の都會になる。物産論に入つては米を首位とした。さうして、

「伊賀の「關取」と來たら、何しろ東京の鮎屋がこれでないと夜も明けられないと言ふのですから、全く天下無敵です。」

と今度は又右衛門と共に無條件だった。

「姐さん、お茶を一杯いたゞこ。餘り喋つて喉が乾いた。熱いのをいたゞこ。」と少時してから松本さんが言つた。

「いたゞこは一寸變つてゐますね。當地の方言ですか？」とお父さんが訊ねた。

「さうです。略して「だあこ」とも言ひます。「その煙草取つてだあこ」とやります。

伊勢の「お母やん」伊賀の「いたゞこ」といつて有名なものです。」

と松本さんはお國訛まで有名にしてしまふ。

第十六回 現代婦人の雞つ子

朝は池に飼つてある白鳥の鳴き聲で目が覺めた。松本さんの指金か、女中はニヤニヤ笑ひながら茶粥のお給仕をした。間もなくその松本さんも見えて、僕達はガタ／＼汽車に乗り込む。それから本線で別れる時、

「昨日休むでゐないと今日は何うにか都合をつけて奈良までお供をするのですがね。」と銀行員は如何にも残り惜さうだつた。

「まあ、紳士の資格を得るまでは辛抱して勉強することだね。」

と三輪さんは先生らしい訓諭をした。

「何うも種々有難うございました。お蔭で上野は頗る材料豊富になりました。」とお父さんは眞正に何か書く積りのやうなことを言つて謝意を表した。

「東京で脂を喰べる時には必ずあなたのことを思ひ出しますよ。何卒御健在で。」と團さんもお禮を述べ、それに和して田鶴子さんと僕が幾度もお辭儀をした。

緩やかな溪流傳ひの笠置邊は何となく長閑で春の旅といふ感じを深からしめた。と

ころ／＼にマムモスのやうな巨岩が寝そべつてゐる爲めか、その間に浮んでゐる川舟や男女の人達が馬鹿に小さく見える。皆遊山の客らしく、中には僕達の汽車を目がけて喝采を揚げるくらゐ酔つてゐるのもあつた。

「鮎の捕れさうなところだね。」

とお父さんが言つた。

鮎の話は先刻から二人連れの乗客が始めてゐた。

「この邊の鮎は昔の座頭と同じやうに京へ上りますが、品の好い丈けに弱い魚ですから、生かして持つて行くのに大骨を折ります。あれでは値も高い道理ですよ。」と甲が言つた。

「は、あ、私は乾からびたのしか見たことがありませんが、あれでも元來は生きてゐるものですからね？」

と乙は剽軽な受け答へをした。斯ういふ時には得て話のはづむものだ。

「去年の夏伊勢へ商用で参りましたが、歸途に阿漕から桶を擔いだ男が乗りました。客車の入口のところ立つたまま絶えず天秤棒を揺つてゐる様子が如何にも氣狂染みてゐましたから念の爲めに訊いて見ますと、鮎だと言ふのです。」

「動悸つとしましたね？ あんたは鮎といふと目も鼻もない。」

「雲出川の鮎を京都へ持つて行くのださうでした。鮎といふ奴は家つきの娘ぐらゐ氣むづかしいものです。

桶の水が川の瀬ほどに動かないと承知しません。それも死ぬの生きるのと言はずに突如上つてしまふから溜りません。そこでその男は笠置に待つてゐる相棒に渡すまで荷を揺り通しです。笠置から新手が又京都まで揺つて行きます。昔なら早駕籠



といふところですか。阿漕からも参りますが、笠置からが主だと言つてゐました。」

「そんなにして京都まで行つたら嘸高いいものにつきませうな？」

「二十錢の鮎が京都に着くと一圓五十錢になるさうです。全くそれぐらゐ取らなければ引き合ひますまいて。」

「そんなものを食つたら口が曲りませうぜ。」

「一桶二十五尾で一荷五十尾一日五荷は運べると言つてゐましたよ。五荷といふと五五二百五十尾、大變な儲けですな。しかし二人がかりだし、死ぬのも餘程あるだらうし、汽車賃も往復五回で……」

と甲は頻りに指を折つて首を傾けた。

「何程儲かるにしても唯成金共の用足しを勤めるだけのことで決して正業ぢやありませんな。」

と乙は餘り感心しなかつた。

「私もその折さう思ひましたよ。二時間も三時間も立ち續いてあの重い桶を揺つてゐるのは大抵の仕事ぢやありません。これが病人に薬を持つて行くとてもいふのなら兎に角、全く金持の口腹の慾を満たす爲めだと考へたら私も何だか不愉快な心持になりました。あゝいふ風に徒勞に骨を折る商賣が多いから社會は案外進歩しないのですな。」

と甲が慨嘆すると、乙は、

「御説の通りです。日本人は少くとも三分の一は大骨を折つて徒勞をしてゐます。」と立ち上つて僕達の方へ歩み寄つた。多分お父さんの反省を促すのだらうと思つたら煙草の吹殻を棄てに來たのだつた。

「しかし此處の鮎は實際好いですよ。この邊では何といつてもこの木津川と吉野川ですな。吉野川では一尺からの釣れます。」

と甲は又鮎の問題に立ち歸つた。

「そんな大なのがありますか？」

「ありますとも。去年私は一尺からのを四五十釣りしました。」

「あんたは大漁のお話はよくなさるが、現物を私のところへ御覽に入れたことは根つからありませんな。」

「何うも恐れ入ります。今度は必ず御覽に入れませう。」

「いや、冗談ですよ。」

と乙は制するやうに言つて、

「一體餌は何ですか？」

「鮎の餌をお訊ねになるやうでは心細いですな。鮎は蚊鉤といふので釣ります。毛で拵へた蚊の形の中に鉤が仕込むであります。」

「成程、二重の詐欺ですな。」

「さうです。しかし普通の詐欺では先様が承知しないから仕方ありません。蚊鉤の數

が三百種からあるほど鮎は氣むづかしいものです。」

「三百種？ 一々形でも違ふのですか？」

「形は大同小異ですが、毛の色合が一つ／＼違ひます。この三百餘種類から天氣の模様や水流の具合に鑑みて一番鮎の御機嫌に叶ひさうなのを撰り當てるか否か、上手と下手の分れるところです。鉤が合へばバクリと來ます。するとビリ／＼ツといふ震動が糸から竿に傳つて脳天まで達します。これが好い心持です。電気治療以上ですな。レウマチスなんか即座に癒つてしまひます。他の魚では逆もかう骨身に泌み渡るほどの手答はありません。」

「それは魚のかゝつた時は嬉しいものです。私も子供の頃釣堀の緋鯉を引つかけたことがありますが、胸がドキ／＼しましたよ。」

「釣堀と一緒にされちや張合がありませんな。ところで鉤が合へば面白いやうに釣れますが、合はないと來た日にはこれくらゐ悲惨なことはありません。隣の人が矢繼早

に釣り上げるのに此方は船の中へ糸を下してゐると同様です。さういふ時には「あなたはどうな鉤を使つてゐるらつしやいますか？」と訊いて見ます。しかし鮎釣りは皆商賣敵で意地の悪いものです。「赤いやうなのでやつてゐます」と答へますが、嘘を言つてゐる證據には赤いやうなのに變へても矢つ張り釣れません。そこで此方は偶然したやうにして實は態と先方の糸へ引つ絡めてやります。さうして、「これは失禮」と手早く手繰り寄せて鉤の色を見届けてしまひます。」

「ナカ／＼人が悪いですな。」

「いゝえ、此方が釣れる時は先方も定つてさうしますからお互ひつこですよ。鮎釣りがらゐる排外思想の旺盛なものはありません。他が何程釣つても決して憂めないこと不思議です。「彼の人の鉤は妙に能く合ふ鉤だ」とか「彼の人の人は場が好いで」とか言つて、道具や場所の所爲にしてしまひます。皆天狗なのですな。釣れなかつた日のことは柵へ上げて、吉野川で一尺からのを四十釣つたの五十釣つたのと時稀の成功丈

けを吹聴してゐます。」

「吉野川は唯今承りましたよ。」

「いや、これは大失策でした。ハツハ、、、。」

「ハツハ、、、。」

と長い顔にも短い顔にも春の光が隈なく照つてゐる。

程なく奈良に着いた。田鶴子さんのお友達の清瀬さんがプラットホームに出迎へてゐてくれた。田鶴子さんと僕は夕刻ホテルで皆に落ち合ふまでに清瀬さんのお引き廻しに委せることになつた。大人連中は差當り子供の壓迫を免れて自由行動を執るに異存もなく、僕達も久しぶりで若いもの同志の世界に戻るのを嬉しく思つた。

清瀬さんはお父さんの轉任と共に東京から當地の女學校へ轉じ、田鶴子さん同様つい先月卒業したのらしい。何方も現代婦人の雛つ子だけに表情頗る逞く、殆ど相掩して、

「私、随分吃驚したわ。眞正に丈がお高くなつてね、あなた。」

「あなたこそ。見違へるくらゐですわ。でも二年、足掛け三年目ですからね。無理もないわ。あの頃同年でしたから今でも矢つ張り同年なんでせうねえ？」

「面白い清瀬さんねえ。そんなことを仰有るところは些つとも變つてゐないわ。けれどもいつかお別れする時には此處でお目にかゝれるとは思ひませんでしたわね。」

「だから矢つ張り長生はするものでせう？ 私眞正にこんな嬉しいことないわ！」

「私も。この胸が一杯で何からお話して宜いか分らないの。」

「いふ風で、僕は寧ろお父さん達と一緒に رفتた方がお邪魔にならなくて宜かつたらうと思ふくらゐだつた。しかし續いて、

「謙さん、それではソロ／＼御案内して戴きませうかね？」

と僕も漸く田鶴子さんの認めるところとなつて停車場前の大通りを辿り始めた。

「これが皆見物客よ。天氣さへ好ければ毎日この通りです。田舎もなかく馬鹿に

ならないでせう？」



と田鶴子さんが怪しむくらゐだつた。

と清瀬さんは僕達の前の團體を指さした。兩側から宿引が大聲を揚げて頬に招いてゐる。と見ると蝙蝠傘を擔いだお爺さんと信玄袋を提けたお婆さんが往來の眞中で立ち止まつた。左右からの引力が全く均等の場合には前進は當然遮られる。宿引は得たり賢しと小腰を屈めながら、

「もしくくくくくくくく……」

とばかり息もつかずに兩方から招き寄つた。その眞剣なこと、

「何うしたんでせう？」

「宿引の競争よ。何方が勝つてせうね？」
と清瀬さんも興味を催した。

「もしくくくくく……」

とその間も血相を變へた競争者はジリジリと獲物に迫つた。鶏を鳥屋へ追ひ込む時の手加減で雙方から等分に詰めかけないと、大切のところではバット舞ひ立つてしまふのらしい。老夫婦は顔を見合せて少時宙に迷つた末、右の方の宿引が一寸息をつき左の方が一段聲を高めた刹那、忽ちそれに荷物を渡した。僅かの氣合で勝負がつくものに見える。それにしても負けた方があれだけの努力にさう執着も置かず極めて事務的に引き退つたのには僕も感心した。

「開化天皇の御陵でございます。人皇九代にわたらせられます。」

と間もなく清瀬さんが左手を指さして言つた。さうして、

「奈良の案内は此處から始めるのよ。遊覽地ですから毎月のやうにお客さまが見えま

す。その都度御案内を言ひつかるもんですからもう悉皆覚えてしまつたの。」

猿澤の池へ来た時も衣掛け柳の下で、

「采女はこの柳に着物を掛けて身を投けました。面當てですわね。」

「采女つて何人？」

と山鶴子さんが訊くと、

「昔の美人よ。君籠が薄らいだので世を果敢なむたのですつて。」

「まあ、可愛さうに！ 愛情問題の犠牲ですわね？」

「さうよ。それに身分が高い上に評判の美人でしたから、今なら好い新聞記事ですわ。きつと器量を鼻にかけた我儘な女でしたらうよ。その證據には後からあのお宮に祀つたのですが、池を見るのが厭だといつて、勝手にぐるりと向きを變へてしまつたのですつて。」

と清瀬さんが説明した。成程采女の社といふのは鳥居だけが池に面して御本尊はツン

と外方を向いてゐる。

奈良には鹿がゐると聞いて来たが、實に澤山ゐる。最初は珍らしくて鹿煎餅を振舞つてやつたけれど、かう到るところで鉢合せをしては應接に違がない。

「あなた方は鹿に紅葉の來歴を御存知？」

と清瀬さんが花の松のところで訊いた。

「いええ。」

と田鶴子さんが僕の分まで答へてくれた。

「それなら石こづめの遺跡を見て参りませう。」

と清瀬さんは僕達を十三鐘へ案内して行つた。さうして、

「昔、十三になると興福寺のお小僧さんが春日様の鹿を殺して、鹿の死骸と一緒に此處で石こづめにされたのですとさ。」

「石こづめつて何うするのです？」

と僕が尋ねた。

「穴へ入れて石を詰めるのです。けれどもこれは嘘よ。その證據にはこのお堂が十三鐘でせう。子供の年が十三でせう。それから石こづめの穴の深さが一丈三尺といふのですもの。さう十三といふ數ばかり揃ふ理由はないわ。」

「けれども十三といふ不吉な數ばかり揃へて動物愛護の精神を表した傳説と見れば宜いでせう？」

と田鶴子さんが註解を試みた。

「人間虐待の精神も表れてゐますね。」

と僕は不服を唱へた。

「真正にさうですよ。兎に角その小僧さんのお母さんが手向けの爲めに此處へ紅葉を植たのが鹿に紅葉の起原だといふのですから益々心細いわ。」

と傳説を出來合のまゝで受け容れないところは田鶴子さんよりも清瀬さんの方が團さ

んに似てゐる。

春日様は一の鳥居から二の鳥居まで随分長道だった。この間も其處此處で鹿に行き
白ふものだから、田鶴子さんは記念のためにと言つて、まさか今しがたの竹筥返しで
もあるまいが、清瀬さんと僕と數頭の鹿を一視同仁にカメラに納めた。折から見物
客を乗せて來た俵が立ち止まつて、

「鹿は悉皆で三千から居ります。夕方の五時にこの邊でラツバを吹いて呼び集め、
「お定り」といつて豆腐殻だの菜葉の切れ端だの餡粕だのを喰べさせます。」
と説明を始めた。

「毎年十月半はの土曜から日曜へかけて鹿の角祭りがございます。これが又珍ら
しい見物で、大變な人出が致します。切りました角は一週間の角祭りを済ました後春
日様の出入商人へ拂ひ下され、お土産の角細工になつて皆様の御調法を致します。
御承知でもございませうが、鹿は至つてお産の軽いものでありまして、産氣がつかま

すとこの邊の路傍に寝轉んで生み落します。さうして物の一時間と経たない中にもう
親も子もノコノコ歩いて行つてしまひます。産婆も何も要つたものでございませぬ。
なほ人間と一つも變らず母の胎内に十月居りますところから鹿の角は安産のお守りと
して珍重されます。それでこの地方では女の子にお鹿といふ名をよくつけますし、又
臨月になりますと髪飾りを悉皆鹿の角細工のものに更へる習慣がございます。」

俵屋さんの安産論が身に沁みたのか、春日様の境内にあつた寄り木神社といふのが
特に僕の注目を惹いた。柞、藤、椿、南天、陸英、櫻、楓の七種が一本になつて覺米
なく生えてゐる。石婦石郎もこの木の枝に紙摺を結びつけて祈願すれば子寶を授かる
とある。尤も片手で結ばないと御利益がないさうだから多少難行に屬する。しかもこ
のお呪禁を根氣好く果してなほ配達の間違のないやうに番地入りの名刺を添へた入念
の叱きくが妙からず認められた。かういふ連中は序に鹿の角細工を買つて行くほど
氣が早いに相違ない。兎に角奈良は調法だと思つた。一箇所で悉皆用が足りてしまふ

ところはデパートメント・ストアを聯想される。

ところへ伊勢の内宮さんのに劣らない杉の大木が生えてゐる。春日杉といつてこの山のは特に名材ださうだ。現に先年倒れたのは大阪の商人が四萬六千五百十二圓に入札したと先刻から僕達の前になつたり後になつたりしてゐる連中が話し合つてゐた。材木としての價値は兎に角立木として實に崇高なものだ。三輪さんは大木崇拜家だから伊勢では大喜びをして、「忝なさに涙こぼるゝ」といふのはこの千古の神杉から受ける催眠術的暗示だらうとさへ解釋した。こんなことを思ひ出しながら手向山八幡へ辿りつくと、何があるのか人群りがしてゐた。

「喧嘩だ〜！」

と僕達の前の連中が駆け出した。成程、喧嘩も喧嘩、朱塗りの社殿を背景に一人の武士と二人の娘が斬合をして、なほ助太刀が二人抜刀で控へてゐた。

「活動の實寫ですよ。」

と清瀬さんが僕達に安心させてくれた。

武士はナカ〜強かつたが、助太刀が手出しを始めたので受け身になり、間もなく妹娘に一刀浴せられて倒れると、姉娘が走り寄つて止めを刺した。「親の仇、思ひ知れや！」とでも言ふのだらうが、口を動かす丈けで聞き取れなかつた。臺詞は寫らないから言ふ必要がない。寫真だから見るところ丈けで足りる。この邊カラーさへあればシャツは要らないといふ現代思潮に投合するので活動寫真は爾く歓迎されるのだらうと思つた。

ぐうたら道中記（をはり）

大正拾四年五月拾日印刷
大正拾四年五月廿三日發行

【定價金壹圓八拾錢】

著者檢



著者 佐々木 邦

發行者 米林保吉

印刷者 鈴木清三

東京市日本橋區下槇町十二番地
東京市日本橋區網袋町一丁目四番地

發行所

東京市日本橋區下槇町拾二番地
弘文社
振替東京三七六九番

小諧謔

新夫婦日記

四六版布製箱入
價 貳圓
送料 十五錢

佐々木邦著

諧謔文壇の第一人者

たる著者は、新婚の若夫婦の楽しき新生活を獨特の輕妙にして洒脫なる筆を以て、赤裸に描いたものにして其面白さに恍惚とせしめ。上品にして定評ある天下獨歩の諷刺諧謔は何人の願をも解かしめる。本書は絶好の家庭文學である。

茲に無爲無職の遇迂多羅兵衛が相棒の建築家、神經衰弱の學者と、飄然と東京を出でて、各地の人情風俗の探究に行き、各地で失敗を演じ其奇警なる觀察と獨得の諷刺諧謔は何人にも失笑せしむ。水島爾保布畫伯挿繪挿入)

小諧謔

ぐうたら道中記

(刷縮)

菊半截布製箱入
價 壹圓八拾錢
送料 十五錢

弘文社版

一氏義良著 近代藝術十六講

價 貳圓八拾錢
送料 拾九錢

黒田鵬心著 藝術概論

價 壹圓八拾錢
送料 拾五錢

吉岡鳥平著 漫畫スケッチの描き方

價 壹圓八拾錢
送料 拾五錢

藤井眞澄著 戯曲の創作と構想

價 貳圓
送料 拾五錢

井東憲著 長篇小説 人間の巢

價 貳圓廿錢
送料 拾七錢

樺島勝一著 ペン畫の描き方

近刊

弘文社版

■ パピニ 著 ■

■ 三浦逸雄 譯 ■

二十四の脳髓

四六版總布製箱入
著者肖像及自署
價貳圓八拾錢
送料拾九錢

ロマン・ローラン以後、時代を支配する者パピニを描きて索むべからず。其詩的熱情と思想的直截と哲學的思念とに於て。ロオランは到底彼の比に非らざる也。本書はダンテ、レオナルド、ヘーゲル、ホヰットマン、メエテ、ルリク等二十四人の典型的天才を論じて、痛烈深刻にして端的なる彼の藝術哲學觀を表明したるもの、寔にエッセイに一新體を開きたるもの也。

自傳 行詰れる男

四六版洋製
箱入美裝
價貳圓廿錢
送料拾五錢

争闘と否定との戦慄すべき闇黒より暗瞻たる性格破産の悲劇的生涯を描きたる本書は、これ時代が生める最悪なる人間苦惱の典型である。宗教を棄て、哲學を蔑視し、科學に失望したる男は、懊惱の果、破船のやうな自己から遂に神を見出して世界的大名著たる「基督傳」を書く動機を與へた苦慮懊惱の記録である。

■ モオパッサン 著 ■
小原 伉 譯 全ベラミ

中版布 價貳圓六拾錢
製箱入 送料拾七錢

弘文社版

292
167

終

